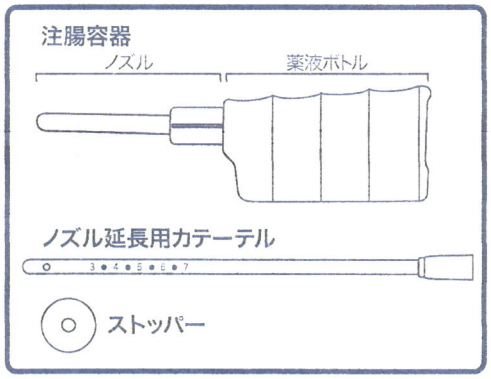
ペンタサ®注腸1g 使用説明書

ーご使用の前に必ずお読みくださいー

●ご使用直前までアルミ袋から取り出さないでください。(本剤の有効成分は光によって変色します。)
アルミ袋から取り出したものは保存できません。

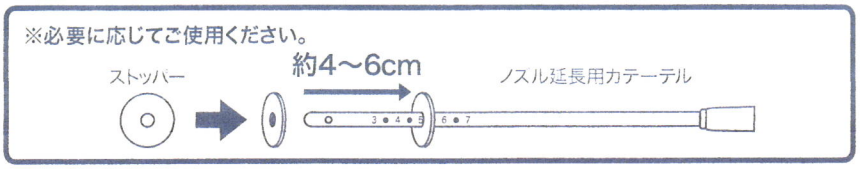
ペンタサ注腸1g製品内容



●柔らかく細長いノズルをご希望される患者さん用にノズル延長用カテーテルとストッパーが付属しています。本使用説明書をよくお読みいただき、必要に応じてご使用ください。

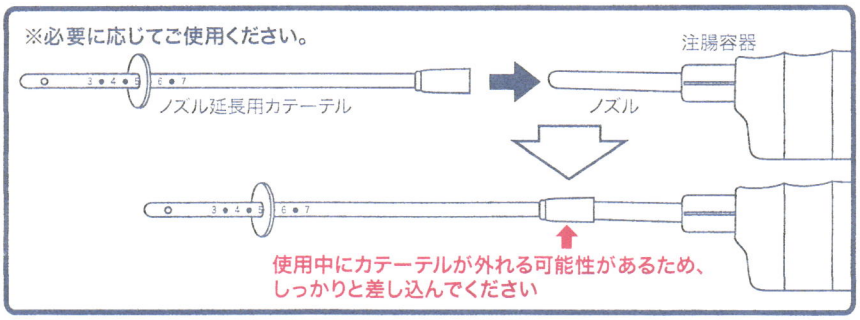
●ノズル延長用カテーテルを使用せずに、注腸容器のノズルを直接肛門内へ挿入することも可能です。ご使用しやすい方法で行ってください。

ノズル延長用カテーテルとストッパーの使い方



●円盤状のストッパーをノズル延長用カテーテルの先端から4～6cm(目盛4～6)を目安に差し込んでご使用ください。

●カテーテルが肛門内に入りすぎると直腸粘膜を傷つけることがありますので、特に初めてご使用される場合はストッパーをご利用ください。



●ノズル延長用カテーテルを注腸容器のノズルにしっかりと差し込んでください。

1 腸を刺激しないために

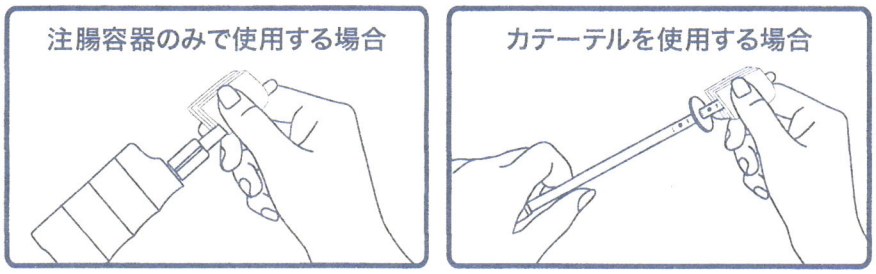
※必要に応じて行ってください。

●薬液が冷たいと腸を刺激することがありますので、冬などの室温が低い場合は、適温のお湯につけ、体温程度に温めてご使用ください。

※特に、アルミ袋から容器を取り出して加温する場合は、温度の上がり過ぎにご注意ください。

2 スムーズに挿入するために

※必要に応じて行ってください。



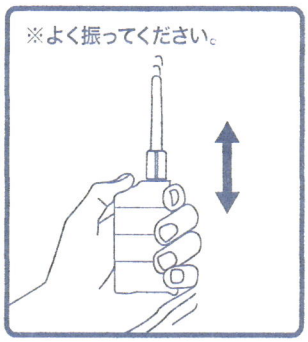
●挿入しづらい場合は、ノズルやカテーテルの上部に潤滑剤(ワセリン、オリーブ油等)を塗ってご使用ください。

※カテーテルを使用する場合は、注腸容器のノズルに潤滑剤を塗らないでください。

3 カテーテルの接続

●ノズル延長用カテーテルをご使用される場合は、開栓前に強く差し込んでください。

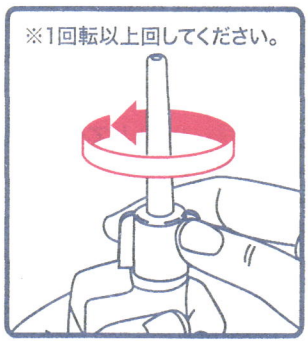
4 注腸液の懸濁



●容器をよく振って混ぜ、白い懸濁液としてご使用ください。

※白い沈殿物がお薬です。上澄液だけが先に出てしまうと、お薬がノズルに詰まることがあります。

5 容器の開栓



●容器を軽く包み込むように持ち、ノズルを1回転以上(360°以上)させると薬液が出るようになります。

※2～3回転させるとより薬液が出易くなります。

【注意】

◆開栓時に容器を強く握りしめると、薬液が飛び出すおそれがありますので、強く握りしめないでください。

◆まちがって目に入ったり、からだに付着した場合は、水で洗い流してください。それでも何かおかしいと感じたら、医師にご相談ください。

◆薬液がシーツや下着などに付着するとしみになります。洗濯するなどすぐに洗い流してください。

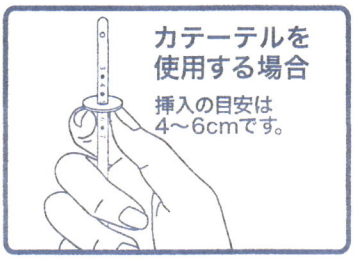
◆ノズルが薬液ボトルにしっかりとはめ込まれていない場合、注入時に薬液が漏れることがあります。開栓時に隙間ができた場合は、薬液がこぼれないようにノズルを薬液ボトルに押し込んでください。

QN-8119Nk-06

6 挿入時の容器の持ち方

●容器を軽く包み込むように持ちます。

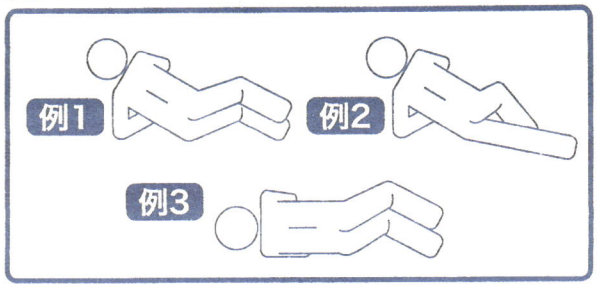
※薬液がわずかにもれる場合があります。必要に応じて、同封のポリ袋を手にかぶせてご使用ください。



●ストッパーの下部や、挿入の目安となる目盛りに指を合わせて持ちます。

※上記の持ち方で挿入しづらい場合は、カテーテルの先端を持ってください。

7 挿入時の体位

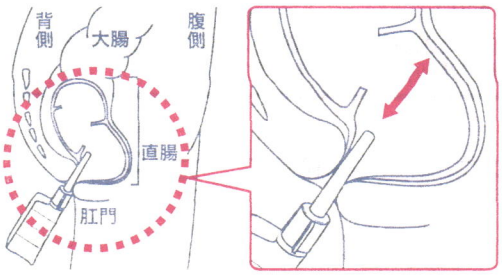


●左腰を下にした体位が基本となります。

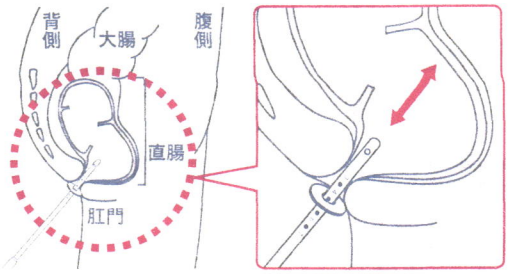
※立った姿勢やトイレで座った姿勢での挿入は、直腸粘膜を傷つける可能性があります。必ず左腰を下にして横になり、挿入してください。

ー挿入時のご注意ー

注腸容器のみで使用する場合



カテーテルを使用する場合



●ノズルが入る長さには個人差があります。無理に挿入すると直腸粘膜を傷つけることがありますのでご注意ください。

●必ず横になって挿入してください。

8 挿入時と薬液の注入

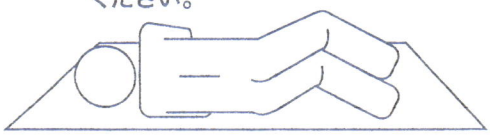
※注入時に薬液がもれる可能性があります。必要に応じて防水シートなどを敷いてご使用ください。
※残液、使用したカテーテル、ストッパーは廃棄し、再利用しないでください。

1. 挿入前に、再度、薬液がこぼれないように混ぜて、白い懸濁液としてください。
2. 左腰を下にした体位で、肛門からノズルまたはカテーテルをゆっくりと無理せず慎重に挿入します。
3. 容器を握りしめながら、薬液を注入してください。
   1) はじめは強めに薬液の注入を開始してください。
   2) 注入は速やかに行ってください。
   （注入時間は1分程度が目安です。）
   ※時間をかけて注入した場合、ノズル内に白い沈殿物が詰まることがあります。
4. 注入後、容器を握りしめたまま、ゆっくりと引き抜きます。

※体位変換は医師の指示のもと、必要に応じて行ってください。

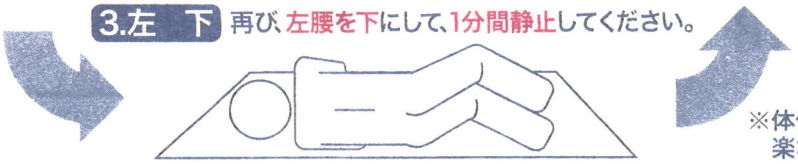
9 下行結腸（脾彎曲）まで到達させる体位変換

1.左　下 薬液を注入後、2～5の体位変換を行ってください。

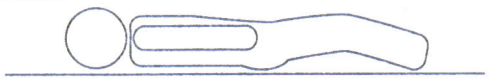


2.腹ばい 腹ばいになり、1分間静止してください。

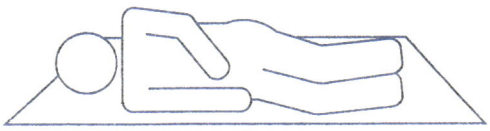
3.左　下 再び、左腰を下にして、1分間静止してください。



4.仰向け 仰向けになり、1分間静止してください。



5.右　下 最後に、右腰を下にして、1分間静止してください。



※体位変換終了後は、楽な姿勢でおやすみください。

●充分な効果を得るためには、注入した薬液をできるだけ長い時間大腸に保持しておくことが大切です。
●薬液を全量入れるとすぐに排出してしまう場合は、無理せず保持できる液量から開始してください。
次第に全量が注入できるようになります。

指導：杉野吉則先生（慶應義塾大学病院 放射線診断科）